

広島俳句倶楽部

令和三年十月作品集

西中国山地

佐保光俊

西中国山地は、私がもっぱら歩いている山域である。広島県内における盤主は恐羅漢山。その日は、被録続きの野田原ノ頭から恐羅漢山との鞍部、台所原までを歩いたのだが、地図に残る目付を見ると、そこを歩くのは二十二年ぶりであった。今回も、そのとき擬走した友人と一緒に。驚いたことに、友人はそのときテントを張った場所を覚えていて「あの晩、ここにテントを張りましたね。大きな獣が近づいてくる足音がしたけど、佐保さんはぐっすり眠っていましたね」と言われて、そのときの記憶が蘇った。

今回の山行は、遠く日本の南西海上にある台風の影響か、時折、強い風の吹く一日であった。

はや夏の過ぎやうとする山にゆく
どなたかが紫陽花入るる祠かな

林道の古きに蟬の生まれたる

県境にしたがひ青嶺歩きけり

この山にいくたび聞いて蟬の声

やや古き沙羅の落花を踏んでゆく

涼風は浅葱斑蝶の去りてより

ひぐらしに近づいてゆく下り道

山に斯くあたらしき墓花さびた

この風は遠く台風あるゆゑか

《作品鑑賞》

村上正人

佐保光俊先生の作品は、日常を離れた山の世界に引き込む魅力がある。鋭敏な五感でその場に身を置き、自然と向き合う時間を過ごして詠んだ作品なのだ。

先生の作品は進化しつづけている。必要かつ十分な言葉の中に、時の推移軸を詠みこみ、四次元的な表現に至っている。

県境にしたがひ青嶺歩きけり

標高千計を超える広島県と島根県の県境を歩いた句である。「したかひ」という表現と詠嘆の「けり」によって久しぶりにこのルートを訪れた感慨が伝わる。

涼風は浅葱斑蝶の去りてより

千m以上を渡る美しい蝶にしばし心を奪われる。ホームページの写真もこのとき撮られたのだろうか。蝶が風に乘って飛び去ったあと、その風の心地よさが残った。

ひぐらしに近づいてゆく下り道

壺の鳴く方へと下っていく。落ち着きのある壺の音が「下り道」ととても合っている。

この風は遠く台風あるゆゑか

下山の時刻が近づくと頭だるうか、溼った風を感じた。先の蝶の句とは異なる風だ。風は時間帯や情景などをつぶさに表現する。そのような風を作者がとても大切にしていることが、この特別作品から伝わる。

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

佐保先生の山の句に、惹きつけられます。

この特別作品では、晩夏から秋への季節の移ろいを詠まれています。その山歩きにこれまでのこの山の記憶が重なり、落着きのある引締まった句に、深い余韻が生れています。

どなたかが紫陽花入るる祠かな

小さな祠に新しい花が供えられている。大切にお世話をしている人がおられると安堵するのだ。

この山にいくたび聞いて蟬の声

人は会うほどに愛着を増す、山もまた然り。この山でまたこの友と聞く蟬の声。それはささやかな喜びであるが、かけがえなく尊い。

涼風は浅葱斑蝶の去りてより

千mを飛ぶという美しい蝶。一心に見つめ、蝶が去ってはじめて涼風に気づいた。

山に斯くあたらしき墓花さびた

さびたの花が咲いている。ふと見ると真新しい墓。花の向うは彼岸なのか、不思議な印象の残る句である。

《作品鑑賞》

亜矢

「西中国山地」は、一句として難解な句はない。それは、十句全てが余計なものを削ぎ落とし、ありのままをありのままに詠んでいるからではないだろうか。作者の山への強い愛情が伝わってくるし、私もその場にいるような感覚を覚えた。

はや夏の過ぎやうとする山にゆく

出発前だろうか。これから入ろうとする山は、一歩先の季節をいっている。「はや」と「やうとする」に、作者の移ろいに対する一抹の寂しさを感ずる。

山に斯くあたらしき墓花さびた

花さびたは、白い額あじさいに似た小さな花。「斯く」という固い言葉で句を引き締め、ひらがなも多用して、さびたの花の可憐さも失っていない。誰の墓なのかわからないのに、悲しみが伝わってくる。

佐保光俊

一本の梨の木のある月夜かな
戯れに鴉の鳴いて残る月

村上正人

帰る子の声の過ぎ行く小望月
十六夜の毘沙門天を照らしたる

高尾ひとみ

十五夜の風に吹かれて帰りけり
十六夜の風の吹ききたる窓に居り

秋沙

大本堂跡に座りて月を詠む
天守閣有明月の懸かりけり

阿姫

居間に杖ついて見上ぐる今日の月
月高し達磨の顔に目を入れて

あざみ

満月や浮き棧橋の波に揺れ
船腹の船の名を読む良夜かな

亜矢

小望月夫と並んで歩きけり
月の夜寝に二階へと夫上る

井藤希

宴果てて客を送れる良夜かな
路地を行く吾の影なり今日の月

栄吉

グラントの賑はひ去りて月今宵
名月や寄らずに帰る兄の家

大橋博子

灯を消して窓に満月ありにけり
米研げば人の声する月夜かな

暁子

欄干にしばらく凭れ月涼し
駅に友送りて戻る良夜かな

新庄憲彦

満月が石州瓦照らしをり
木の影が壁にくつきり月の夜

すみれ

小望月夕餉のあとの静けさよ
夕月は一番星のすぐそばに

知佳子

明日には雨の降るらし今日の月
橋の上人影消えて十三夜

ちどり

母が家へ帰る小道を月照らす
稲刈を仕舞ひて帰る月の道

友岡葉山子

欲の煮き顔で見てゐる後の月
昼月を見上げてゐたる大枯野

ふじ女

月今宵右と左の手の乾杯
名月は別の銀河に高くある

松田裕子

夫と見る今宵の月や共に老い
行くところ行くところ満月のあり

美耶

客船の動き始める月明り
久々の長電話する月の夜

森口良樹

名月やあまたの星のしづまれる
海峡の水面に揺るる今日の月

綾乃

満月の雲より出よと子と見詰む

英一

月隠れ雲から洩るる光かな

大畑恵

月の夜の芒の原の風に揺れ

上島康子

名月を眺め長距離電話する

紀英子

満月の話で終る電話かな

熊谷ゆり子

望の月雲間雲間に見てをりぬ

桑門わかこ

夜の法座月の明るく散会す

高嶋彌代

大灘の潮騒聞こゆ十三夜

民

山の端をくつきり照らし月昇る

ちかこ

血洗ひ残してまづは月を見る

津田玲子

山裾は遠くにありて昼の月

撫子

十六夜を橋の上より眺めたる

穂高

三日月と星一つある今宵かな

みさ子

明け六つの空に昨夜の後の月

宮田保江

寝る前にまた満月を見上げたる

やす保

月仰ぎ一句詠むこのうれしさよ

山崎桂子

国道のまっすぐ先の今日の月

山野ウタ

夕月夜一番星の今見えて

みんなの止めばこの世の無きごとし

秋の蝶露のひと粒吸ひにけり

赤蜻蛉しばらく横を飛びにけり

紅葉へと古きよき名の橋架かり

秋の山思ひ思ひに歩きけり

大滝も小滝も秋の声のなか

風のなか村の外れの通草引く

鶉の声まぎれもなくて今朝の岸

松手入終へたる家の静かなり

月はいま西へ傾き虫しぐれ

佐保光俊

早朝の誰か剪りゆく薄かな

林道の手入れ済みたり秋の風

青空のもと梧桐の実を見上げ

急のこ草てんでに傾ぐ川原かな

濠端の公孫樹色づきはしめたり

雲の間にしかとありけり今日の月

門入れば足元に散る実紫

雨の音静まりてよりちちろ鳴く

小声にて参考書読む夜長かな

弁当のおにぎりにする零余子飯

村上正人

一輪の睡蓮にまた人の来る

あかどきの雨に虫の音しきりなり

葛の花ここから上り坂となり

またつぎの藤袴へと蝶移る

真上から日差を受けて花カンナ

秋澄むや時をり人の鐘を撞き

夜の更けて虫の音にまた聞き入りぬ

月今宵いつしか時の過ぎにけり

さまざまな虫の音に夜の更けにけり

虫の音にいつしか心しづまりぬ

高尾ひとみ

庭の草ひとり引きたり朝まだき

元安川河岸に座せば蟻の来る

川風に夕顔の花揺れてをり

天守閣石垣に聞く虫の声

小望月吳婆々宇山に昇りけり

湯浴みして扇より見る今日の月

今日の月雲より出でて雲に入り

五景松透かして眺め今日の月

薄雲に見え隠れして望の月

薄雲に包まれてをり芋名月

秋沙

野に出れば蟋蟀のあまた飛び立ちぬ

農小屋を開ければあまたの子蟪蛄

工場の灯の連なりて月の雨

背山より竹伐る音の朝かな

宮の上豆名月の昇りたり

菊の花咲かせる庭を覗きけり

朝寒や歩く日課の三千歩

破蓮の中より鳥の飛び立てり

晩秋の雲の低きを歩きをり

初鴨の入江に浮ぶ百羽かな

あざみ

秋蟬や被服支廠の長き屋根

木を仰ぎ秋蟬の声聞きふたり

山の上エスカレーター秋の蝶

木の葉落つ休館中の美術館

鳥の来てすぐに立ちたる秋簾

夕餉時残る蚊叩く男の子

幼児の靴揃へ置く柿日和

じやんけんの大きな声して天高し

燈火親し父と子の見る通知表

微熱の身丸めて眠る夜長かな

亜矢

夏の雨重機置場に幌掛かり

青柿に朝日差したる静けさよ

昼前に一つ咲きたる月見草

公園に鐘を撞く人秋に入る

実石榴のこちらを向いて垣根越し

蚊屁虫樟の根方をせはしなく

裏庭に咲かせし曼珠沙華赤し

玄関に朝日の差せる白露かな

どんぐりの音に小犬の耳を立て

妹の玄米持ち来る秋の午後

井藤希

一音に窓を開ければ蜻蛉来る

コスモスの一段高き荒地かな

老犬の抱かれて通る曼珠沙華

下戸なりに匙一杯の温め酒

秋の蚊のページをめくる風に揺れ

秋惜しむリユックサックに鮎を入れ

あらかたの稲架の埋まりて人通る

穴惑ひ道過るまで見送りぬ

木の実落つ足の運びを早めたり

秋の雨静かに竹の揺れるたる

栄吉

払ひたる枝に空蟬庭手入れ

かなかなに雨の気配の風が吹く

傍らに秋の薔薇咲く禊子像

秋暁の鳥の来てゐる供養塔

朝まだき俄に響く秋の雷

月光にいよいよ著し鳥の影

波の音近くにありて星月夜

小鳥来る梢の届く滑り台

うだつ置く路地にとりどり秋の花

朝顔の種のこばれて刈られけり

暁子

女来て藪萱草を剪りにけり

甲高き声の聞こゆるプールかな

石榴の実ここらあたりが果ざかひ

カーブする線路の脇の彼岸花

滝落ちて豊後高田の秋の川

学校へ団栗の道踏んでゆく

檸檬手に尾を振り歩く鴉見る

枯枝の中に揺れけり猫じやらし

稔り田の中を阿蘇へと列車行く

噴煙の阿蘇を高きに登り見て

新庄憲孝

一字書く度すいっちよの声を聞く

野分晴ベンチの人に鳩寄りて

カーテンを閉めず名月見てゐたり

松の影畳にとどく良夜かな

満月の流るる雲に色を変え

十六夜の屋根すれすれに見えてをり

居待月手を支へられ見にゆけり

恙なき秋の一日を夫と居て

木々の葉のひるがへりては秋気満つ

季語集を捲つてゐたる夜長かな

すみれ

川端の菩提子に手を伸ばしたり

ここからは初めての道秋うらら

蟋蟀の声に振り向く城の濠

鳳仙花たそがれ時に見てゐたる

千切れ雲つぎつぎ通る大花野

麓までうねつてゐたる稲穂かな

水引草小学生のふれてゆく

美術館への道木の実を拾ひつ

山肌のくつきり見ゆる鴈日和

幼子の指差す先に公孫樹散る

知佳子

霧の中姿を見せず小鳥鳴く

霧晴れて木を次々と鳥の飛ぶ

故郷のコスモス風に揺れてをり

稲の上二匹連なる赤とんぼ

稲刈を終へて見上ぐる月の空

故郷の稲刈すべて終はりけり

栗拾ふ林は姉の墓の傍

たつた今木から落ちたる栗拾ふ

幼子が穂の中から栗を取る

下駄箱の上に穂栗飾りけり

ちどり

爪立てて猫の上れる網戸かな

石垣の切れ目に見えて鳳仙花

秋すだれ灯下の人の見えてをり

月明の湯に浸りゐて虫を聞く

役終へて棒に戻され紫山子かな

赤とんぼオロンの音に聞き惚れて

星飛ぶや母の残しし衣解き

笹笛の聞こえてきたる秋の昼

やうやくにネオン点りて秋深し

冷まじや瀬に流水の絡みをり

友岡紫山子

熱唱のしじま眩しく秋入日

街角とスマホと娘秋日和

字余りの後悔いつか秋の空

他の人ばかり褒めてる秋の声

一言でお箸の止まる秋の暮

初紅葉ゲームの少年を囲む

轟音のバイクと交差秋の川

朝寒の文句今更ドアの外

美容院ふと濡れ髪が身に入みて

団栗も特別な型美術館

ふじ女

鬼やんま頭の上を高く飛び

芒野を高く越えたる大鴉

芒野の揺れて一番星上がる

花芙蓉垣根の上に葉も揺れて

彼岸花辿れば村の外れかな

待宵の岩へと波の寄せにけり

終電の窓から見たる望の月

雲切れて満月の端見えてくる

雲の間を上り大きな今日の月

朝な朝な金木犀の塵を掃く

松田裕子

鬼やんま石灯笼に翹おろす

墓参して帰りの道は秋夕焼

芒原風立ちて絮舞ひ上がる

行きにふれ帰りにふれて萩の花

過ぎし道振り返り見る曼珠沙華

野に立ちて峰近くあり秋の風

月光の差す灯台に波の寄せ

露草の数本を摘み戻りたる

コスモスの群れて揺れをり線路沿ひ

野ばらの実たわわに鳥の行き交へる

美耶

団栗に園児の列の乱れたる

草紅葉阿蘇の火口はどこまでも

山腹のその黄葉は岳樺

それぞれの軒に吊るして柿簾

浜風に揺るる穂芒二三本

秋祭港に大漁旗を揚げ

藩目の上に落ちたる実紫

星流れ連絡船は島泊り

長湯して窓に聞きたる虫の声

鹿の声夜半の闇より聞こえくる

森口良樹

さざ波と鱗雲へと竿を振る

釣り道具さつと片付け秋の暮

梔子取った梨は水よりみずみずし

たわわなる葡萄をくぐり葡萄狩

黄落や病室に子の付き添うて

退院の患者を思ふ秋の夕

背負ふ子に月を見せつ歩きたる

師の舞を見つめてゐたる月夜かな

アコーディオン弾く人の居て秋の園

綾乃

聞ぎ合ふ鱈の音する魚籠の中

紫蘇の花実れば種となりにけり

すいっちよの軒の籠から聞こえる

秋の浜老いたる夫婦犬を連れ

実る秋握れば蚯蚓の多く居て

芸備線列車にコスモスの揺れて

秋じやがの花に帰りのチャイム鳴る

父と子の影踏み合うて秋日暮る

たんたんたんたんたと散る木の葉かな

英一

夏終るコナ退散願ひつ

隔離され墓参りさへ叶はずに

仰ぎ見て声を掛けたる鱗雲

山に沿ふ蕎麦の畑に花の咲く

奥深き故郷の山牡鹿鳴く

コスモスの揺れては戻る散歩道

木犀の香りの中を歩きけり

石路の花遙かな故郷思ひけり

茶の花の一つ二つと咲き始め

大畑恵

墓のある芒の原に風とほる

鈴虫の鳴き声のなか眠りけり

猫じやらし野のあちこちに揺れてをり

膝ついて草取る人に秋日差す

振り返りまた満月を見上げたる

団子汁供へ一人の月の宴

望の月雲の切るるを待ちにけり

大木の熟柿となるを待つてをり

旧友の笑顔懐かし貴船菊

宮田保江

ひと風に舞ひ上がりたる草の絮

採つてきし葎を並べ友と見る

秋蜂の羽音を近く散歩せり

小望月貨車は鉄橋渡りたる

松籟の濠に揺れけり今日の月

梵鐘の運ばれてくる刈田道

鋤き込んで新藁かはる棚田道

照紅葉餅大きく返り来て

立ち話しつつ日向へ秋深し

山野ウタ

高階のテラスに吊るす軒忍

夕暮のバス停に松虫を聞く

唐黍を畑に折りて空真青

川土手に杖つく夕べ柳散る

草紅葉踏み分けてゆく駒ヶ岳

鎮守社に老大公孫樹散り敷けり

無花果の熟るる菩提寺夫忌日

河口湖に風来たと友の声

阿姫

たはむれに夫の背に投げ盗人萩
秋草を踏んでゆきたる通ひ道
西空の月へと白き道つづく

月の夜を帰り来て足投げ出せり
名を知らぬ木の実たわわな坂上る
新米を荷台に積んで運びたる
実南天色づくほどに傾きぬ

大橋博子

満月のくまなく照らす獣まで
久々に訪ふ玄関の紫苑かな

庭手入ただ無心なり秋一日
家中の戸を開け放つ秋日和
新米の届いてゐたり留守の間に
山里の行く人もなき秋の暮

紀英子

鈴植のレモンの青き鳥の家

秋の日の鈴植のよく水を吸ふ
月光の障子の内に座してをり
庭木刈り空広くして暮れてゆく
まづ母の部屋の障子を張り替ふる
欄干に御堂の障子重ね干す

桑門わかこ

旧来の友と見上ぐる宿の月

品種ごと名を書き添へて柿送る

手のひらに朝顔の種集めけり

秋深し古きピアノに向かひたる

木犀の匂へるままに日の暮るる

撫子

名月の手水鉢へと映りたる

暮れてゆく空に羽ばたき稲雀

コスモスに薊一輪混じりをり

鳥の来て金木犀の枝に居る

上島康子

一筋の轍の残る花野かな

土手沿ひに薄を見ては歩くなり

竹林の上に出でたる寝待月

二階から落としてみたき白南瓜

熊谷ゆり子

薄雲に滲んでゐたる今日の月

山栗の豊かな森に入りゆく

ゆつたりと湯船につかる十三夜

穂高

朝早く虫の音聞いて散歩かな

三味の音秋の夜長を流れ行く

阿波久

秋の雨ユツカの花にかかるなり

名月を離ればなれに見上げたる

高嶋絹代

十六夜の流るる雲に見え隠れ

十六夜の雲間に浮び光りけり

民

石塀の角を曲れば柿たわわ

更生のミシン一針菊日和

ちかこ

秋夕焼墨絵のやうな山と山

刈られたる萩の枝から新芽出る

津田玲子

鮎一つ含み初秋の散歩せり

ベランダに隣家の庭の虫の声

みさ子

秋うらら野猫ゆつくり道よぎる

憂き朝の鶏頭に水遣りにけり

やす保

名月や団子いろいろ選びたる

星月夜家族同士の顔合せ

山崎桂子

令和三年九月度作品集より

あざみ 私の選んだ十句

夕蟬にますます雲の白きかな	佐保光俊
まだ明けぬ夜に目覚めたり夜鷹鳴く	村上正人
蝸を聞きながら山下りけり	高尾ひとみ
晴雲や被服支廠の壁の染み	亜矢
試歩のとき襟元抜ける秋の風	すみれ
登園に泣く子の握る猫じやらし	栄吉
水底の砂の流るる晩夏かな	暁子
体操着並べ干したる秋の庭	知佳子
轡虫ここの茂みで鳴いてをり	ちどり
秋風や早も絵具の乾きたる	新庄憲彦